

対話

「対話」欄について（編集委員会）

本誌前号が刊行されたのち、テーマや対象の重なり合う二冊の重厚な論文集が刊行された。赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』（影書房、二〇一四年六月）と、出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』（法律文化社、二〇一五年一月）である。前者は、早稲田大学出身者を中心として三十余年前に発足し、その後活動を拡大してきた日本現代思想史研究会の最新の成果、後者は、同志社大学人文科学研究所に設置された研究プロジェクト「戦後日本思想の総合的研究」（代表者出原政雄、二〇一〇年四月～二〇一三年三月）の成果であり、どちらも精力的な共同研究に基づく重厚な論文集となっている。もとより関心の所在は異なるとしても、両方のタイトルに「戦後」「知識人」という言葉が含まれていることが示しているように、両著の取り扱うテーマや取り上げる対象には重なり合う部分が多い。そこで、編集委員会は、「書評」で両著を個別に取り上げるのではなく、「対話」という欄を新設して、それぞれの論文集で重要な役割を果たした方に相互批評していただく、という試みを企画した。寄稿をお願いしたのは、前者からは編者の一人の黒川みどり会員、後者からは研究プロジェクト

の中心メンバーの一人であった長妻三佐雄会員である。相互批評を通じて両著それぞれの特長が際立ち、全体として到達点と問題点が明確になることを、編集委員会としては期待している。両著に共通する特徴の一つは、戦後知識人論のオーソドックスな対象（丸山眞男・藤田省三・鶴見俊輔など）に加えて、これまで取り上げられることの少なかった対象（溝上泰子・丸岡秀子・糸賀一雄・大宜味朝徳など）や、そもそも知識人という枠では考えられてこなかった対象（濱谷浩・大石又七や、西信夫・飛田雄一ら地域・平連の活動家など）が、幅広く取り上げられている点であるだろう。両著では、期せずして同時に、「戦後」の「知識人」の捉え直しが行われているように見受けられる。このような場合、既存の「書評」欄よりも、この「対話」欄のような取り上げ方のほうが、より多角的・立体的な議論の展開を促しうるという点で、よいのではないか。そのように考えて、この「対話」欄を新設した。読者のご意見を待ちたい。